



景清外傳
三編
二

^ 13
2891
12



門 へ 18
2891
卷 12

景清の
外傳



操三編卷之二

東都 絳山 戲 錦

昭和九年七月三日

第廿回

雇夫勇を示して酔狂を挫く
智臣謀を施して刺客を退す

斯て悪七兵衛景清ハ彼下吏小伴とて永福寺をぞ踵ぐを。 押出下吏と云ハ則是本田二郎とハ前説話が如く萬小老練 たるものある不志うも一の郎黨あれば重忠が近經を撰び下 吏といふ一たるあり。近經今回の主命易くらぬ重任と思へハ 下を優恤おのよを正し。些の私あううく諸職人近經小懐 ぎよく其命小従ひたり。さて近經ハ景清を造営の場小伴ひ

景清三編卷之二

来て。職人ホ小紹會一。景清が擧動を語。且彼が望の不
 とを告。何思ふありと加へて。雇人とあまづきよしを云聞ゆ。是を
 下吏の命。いりて辞んありて。牛車を援たる。尋常あるぬ力
 量あれ。みち喜ばて云へり。なる。爾る人の頼ふても。得あ。ほし
 きものある。小彼より望を幸し。と景清の對ひ其名を問ひ。その
 得はる業を尋る。小景清の平家。て士大將あり。く。賤しき
 職のる。あんと。目ふく。よはやく。觸ざれば。何ま。為る。知ら
 ざり。が。を。造營の。揚。立入らんと。思ひ立。ころ。ま。く。の。の
 を。試。小。壁。塗。り。の。女。く。為。ま。づ。も。お。が。く。が。泥。水。近。小
 姿。を。窄。たり。ま。く。お。の。り。變。名。を。が。豫。て。紀。女。と。名。衆。居。れ。が。此
 時。回。志。なる。や。ハ。某。が。名。ハ。紀。女。と。呼。ば。泥。水。運。を。り。て。生。營。と。を。

爾はま。ま。ま。も。生。得。て。智。少。く。才。短。く。て。壁。塗。り。の。不。東。ふ。れ
 ば。た。の。雇。人。と。あり。か。を。け。き。價。を。と。り。ま。づ。れ。が。此。身。一。を。扶。く。粮
 ひ。か。ひ。て。都。り。この。鑑。倉。を。さ。あ。ひ。下。に。ぬ。斯。む。く。某。小
 てる。雇。ひ。の。ふ。り。あ。が。が。幸。な。れ。小。増。と。あり。と。信。く。ち。小。厨。の。る
 小。を。棟。梁。の。漢。子。と。も。女。回。志。する。を。ち。聞。て。足。下。ハ。壁。塗。の。こ
 ち。あ。う。で。何。の。業。も。な。が。さ。ら。る。と。宣。は。ま。と。幸。く。小。脚。堂。造。營
 ハ。今。事。始。の。當。時。あれ。が。壁。の。り。不。及。小。ま。で。い。遙。の。り。小。ゆ。あれ。が
 ち。が。それ。ま。で。い。我。輩。の。為。業。不。は。ひ。て。助。け。ぬ。と。云。小。景。清。ろ。ろ
 ぶ。い。お。り。ち。あ。う。て。云。り。なる。鑑。倉。と。の。命。あ。て。造。營。く。ま。入
 場。入。る。ハ。我。輩。の。冥。加。あれ。が。何。を。厭。ひ。何。を。許。ん。足。下。等。が
 云。小。従。ん。と。喜。び。て。領。掌。せ。り。と。さ。と。興。日。より。景。清。を。杖。木。土

石を運こべ人夫のうちこふ加こしり。日ひく造ぞう造ぞうの場ばふ立た入いら
ぬ共とも所ところハ諸しよ國こくの職しやく人にん等ら大おほ勢せ會かい寄よふるらあれば。都みやこのものも
多おほしりして。それごと中ちゆうのもの其その古ふる平へい家けの覆か庇びを蒙まかりて。景けい清しやうの
家いへ小せう膝せき行ぎやうして。面めん漆しやくるものもありしり。と。とく姿すがたをま空からし
たれば。紀き女によをりて。景けい清しやうと。知しるものの嘗かつてありたれば。景けい清しやう心こころお
これを喜よろこび。よろもの川がはを慎つしみ身みを厭いとむ。土と石せきを運まび信まかり。何なん
らんとあくもののしらるものあど。棟とう梁りやうをまとり仲あひ間まのものも。紀き女によあ
このあらトとて。皆みな人ひととれを愛いとふもの。日ひ月げつ梭あきのごとく。光こう陰いん過か易えきく
して。文ぶん治ち四し年ねんもちや。暑あつて。同おなじき五ご年ねんの春はるもちありぬ。叔しやくしも
永えい福ふく寺じ造ぞう造ぞうの。奉ほう行ぎやうありものる。重ちゆう忠ちゆうハ。去こ年ねんより。野の勞らうふて。暫ちゆう時じ
其その職しやくを休やすらひしり。が。此この春はる不な至きたりて。病やま愈な果はるらば。造ぞう造ぞうの光こう景けい

を見みんとて。今日けふ永えい福ふく寺じ不なりき来きり。其その不なりきと。出い来き不なりき。野のを。
其その所ところ以も野の細こちり不な見み巡めぐりて。仮かり屋や不な入いて。下した吏しをま石いし。某この病やま不なり
まはれば。暫ちゆう時じ此この野の不な来きらる。ふりし。不な思おもひの外ほか不な果は敢かんて。近ちか日ひふら
落お成なまる。これ足あ下した等らが。其その職しやくを。急いそらるば。諸しよ職しやくのものも。その
為ために。處ところをましり。速すみるもの功こうをま頭あたましり。我われ其その勞らうをま賞あやせんと
思おもへば。梁りやう等らをまとりめしり。職しやく人にん夫ぶ不な至きたるものまで。一いつ杯はいの酒さけをま勸すす
めんとす。今日けふむらりハ某この免めんをま礼らい讓じやうふく。醉まをまりし。近ちか日ひのもの
齋さいをま散さんぶしと。云いふはて。從したが者ものをま顧かへるものとありられば。豫よて
准しゆん備びやありしたりらん。をまくも心こころ得え裁さい許しよの酒さけとま肴さかなをま仮かり屋やの
裡うちへおき荷ひ入ておし。唇くちびるゆれば。下した吏しハ。頓とん首くびしり。この冥みやう加からるが
命いのちをま身み不な肖せうある。我われ們ら。此この造ぞう造ぞうの命いのちをま奉ほうて。過あや失まちありしら

畏しと。身を檀やいさ不あせむ。其あ後家あハ酒肉あを禁きト。一滴いつてきの酒あも飲のむらト。然しかるあ不あ旨あ殿あの免あして。斯あむろの酒あ肴あを賜あ王あたまは。今日あをろの酒あを飲あ。近日あの爵あを嗜あ一ありさん。あるあ。殿あの注意あよ。一あたびて感謝あし。職あ人あ等を呼あ集あへ。重忠あの園あへほる。昔あを詳あら不あ傳あ人あ知らし。こハ殿あの賜物あぞ。心あおきあく。今日あをろ。飲あむ一あと贈あ王あたる。酒あと肉あとを与あし。賤あきりぬ。習俗あとて。飲食あを好あまむ。輩あハたてあきふのうら。誰ありをこれを辞あむべき。こハ有あかど賜あものうら。辞あハなうく。畏あしと。飲あむと。小食あやと。血あ不あはく。繩あのむく。礼あ讓あとあく。飲あむ食あ不あ配あ盤あ狼籍あと。興あ闌あ不あ及あびぬ。たとなる。声あをうたて。歌あ唄あふ。のあれば。よろふ。足を踏あ不あら。舞あ

かかぢる。りのあり。かのがまふ。く。ち。興あまれと。景清あむ。酒あを飲あむ。人の酒あ不あく。酔あで。倒あま。伏あし。たる。を。授あけて。其あ席あを去あら。めふ。一あ。渾あて。是あ等あの。り。を。の。心あを。配あ王あて。優あ恤あ。其あ時あ五あ二人あの。工あ迄あ。何ある。か。らん。望あの。り。を。幸あひ。出あして。始あの。り。と。ハ。云あ罵あ。其あ居あ。り。一あ。後あハ。其あ黨あ。方あ人あ。一あ。互あ不あ擊あ合あ。相あ合あて。上あを。下あへ。と。發あ動あ。下あ吏あハ。驚あて。声あを。を。一あ。削あま。れ。と。其あ勢あの。り。の。幸あひ。あ。れ。ハ。削あま。る。声あを。耳あも。合あ。只あ顧あ。幸あひ。不あ聞あひ。て。今あハ。飯あ屋あも。これ。が。為あ。不あ。お。一あ。朝あ。さ。る。べ。う。え。あ。不あ。ろ。り。重あ忠あハ。外あの。飯あ家あ。不あ休あら。ひ。て。居あ。り。一あ。が。あ。ま。り。不あ。物あ。發あ。り。一あ。く。あ。り。一あ。か。ど。不あ。下あ。吏あ。あ。る。逃あ。經あ。を。呼あ。び。飯あ家あ。ハ。何あ。る。あ。り。や。つ。と。發あ。り。一あ。く。聞あ。こ。ゆ。る。ぞ。そ。ハ。素あ。より。精あ。舎あ。あ。る。不あ。聞あ

争の多あはばいとも畏きまどがうとくく制しゆべい。わい
 云慮を用ひむハ一人の遺さるる捕へいとと嚴小云因と
 けふ不近經畏之兼王。故の飯家小立疾王。國争の中小分入て
 伊木何等の故をわて斯發動不速びしを畠山殿もつてせ
 めんをいり不恐ませせや。とく慎あうむハ石捕て一う亂明
 せんまゐるハと。いさまうくおらく罵まハ。酒氣十分ある工人もの。
 争ひ暴里しるあれハ其心氣よく猛く鬼神も怖はぬ
 勢ひあれハ。近經ふ云を聞しうむ。や何と云へる。我を捉へ
 亂明さまとや。そめく今日の喧嘩の發ハ畠山どの、酒たびて
 夫よりしてのりあれハ。何程の強きをまとも。無礼の祟りを
 稟ん。いらさる本田が削一だて、彼奴小言不つせをと。手斧

鍔挺其外ハおのれが職の器をりて本田を目け撃人し。ま
 本田もさむが武士あれハ。職人げれを魔。怖と不覺をぞいハ
 契后ハ人小面ハ合されど。刀の端を天さぬハ。汝ハ推赤免
 さトと。寄らハ斬ん光景あり。職人京ハ大勢あれハ。さむがハ
 寄も迷りけりむ。互ハ白眼居し。最前より景清ハ。契
 斃たらハ。を窺ひ居王。が心裡不念ざるや。今ハ本田ハ
 方人セバ其切不し。頼朝不近寄術も出来んろと思ひ出
 して慌忙ハ本田を支て云うろハ。これ死示ハ。あハハ
 おんを何と云か保まぞや。契造營ハ畏くも。縁倉ふハ。頼
 として奉行ハ名ハ人秩父ふ。其代宜ハ。あハハ。爾ハ重
 き身を輕くし。匹夫のあハ。醉狂を咎めハ。ハ。端。

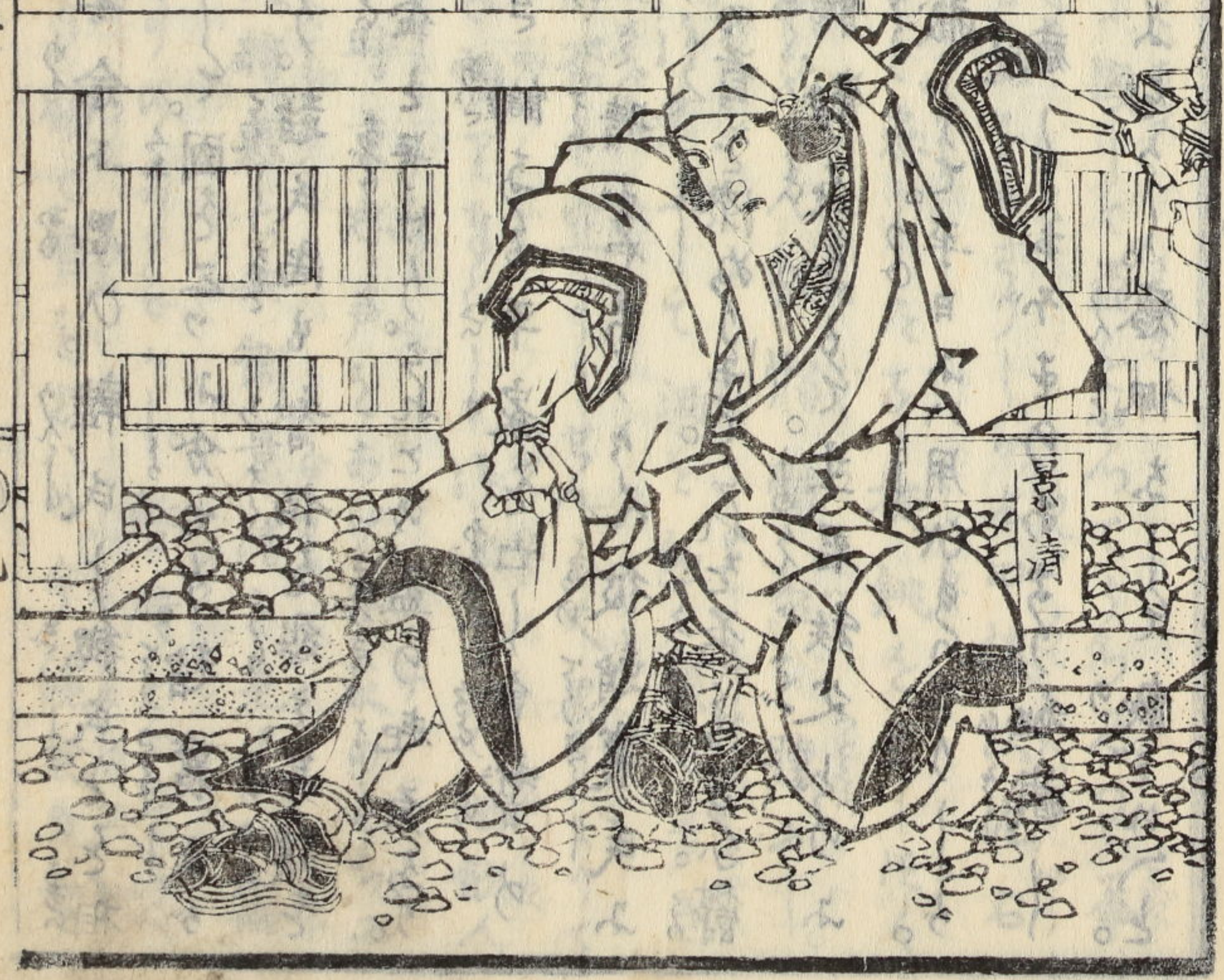
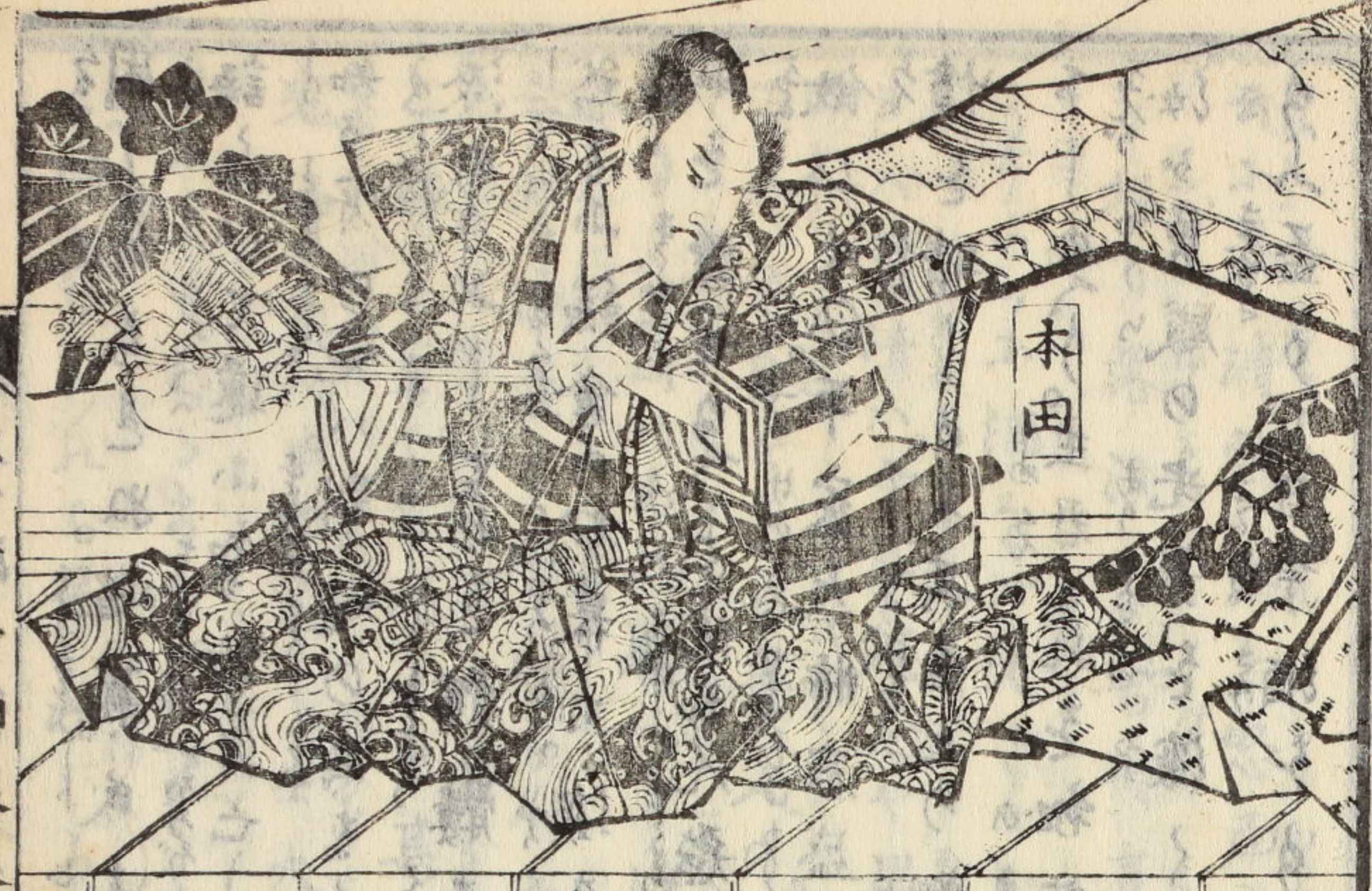
ちうく過失多かり。かゝる身のこゝろ鑑會とのまじ。耻ぢかり
 を小速びふん。こゝハ我小任し多くと云はれ、勢ふち
 對ひ畠山どの代官たる。近經大人小敵對ハ。ちうもあを
 さぞ鑑會とのへちを弾とつゝのあり。とくく静なり
 作入と。高かり小呼ばれ。皆一般ふち笑ひ。いつぎ。紀女が
 言と下。わの色ホ如き小さる。さよ被奴より。まが辛きめ
 見せんと。本田をさし。罔景清を。おつと。籠て討ん。とこと。
 景清呵く。とち笑ひ。理非を分るぬ。嗚呼のりの。今ハちや
 近經大人小代りて。つぎや。紀女が。午あとのねとをえまじ
 と。真前小進。ユ近ホを。手あがり。次牙小なき。捉へ小石あ
 とを。投るがどい。ちうまじくと。投撃少ぞ。殿へ小並居。

しのども等。其人礫小撃居られ。將戲卧のとくあて。
 かが上小卧。伏。起んくと。罔ゆれと。大勢小麿。小一りき。
 一入と。起るとち。春睡を。叫びたれ。景清とれえん。
 ちうち笑て云。りち。某ふまら。如斯。辛き目小逢入りのを。
 近經大人の手をおろさバ。必定命ハとらえ。これ小懲く
 とく静まれと云。小人景清が。手あま。小酔も醒めを。
 前のるを。後悔あり。皆一盤小廉忽のねどを。悔ひ耻らひ
 て。ちう詭ま。景清ハ。ちう点首。實先非を。悔るまじ。おまじ
 仲間の好身あり。近經が。小説てえん。暫時ち。小待居り
 秘と。云は。ちう近經小對ひ。所覽どく。職入。原。先非を。悔
 ひて。詭ま。りぬ。原来。本心より。出。一。無礼。小。ち。酔。狂。小

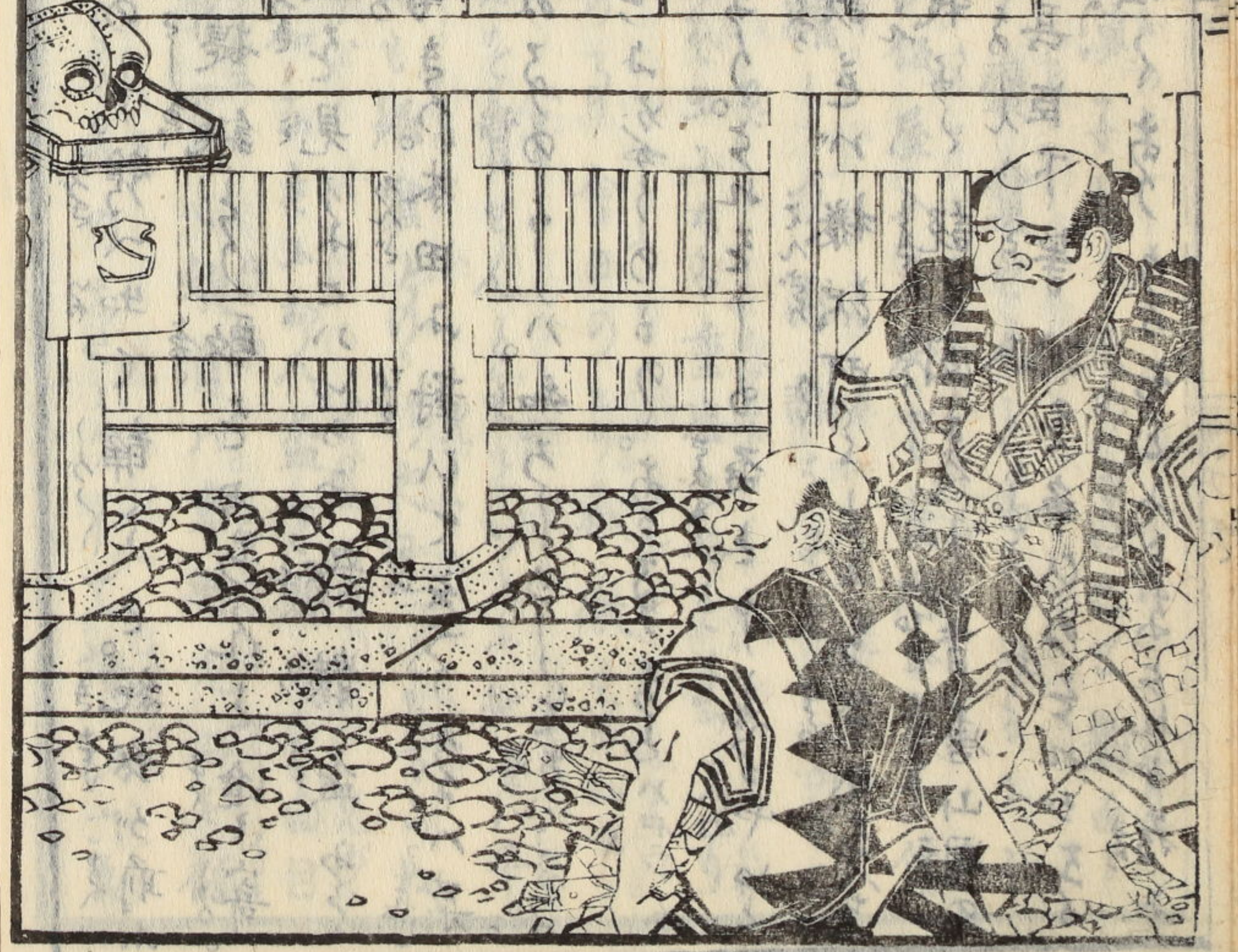
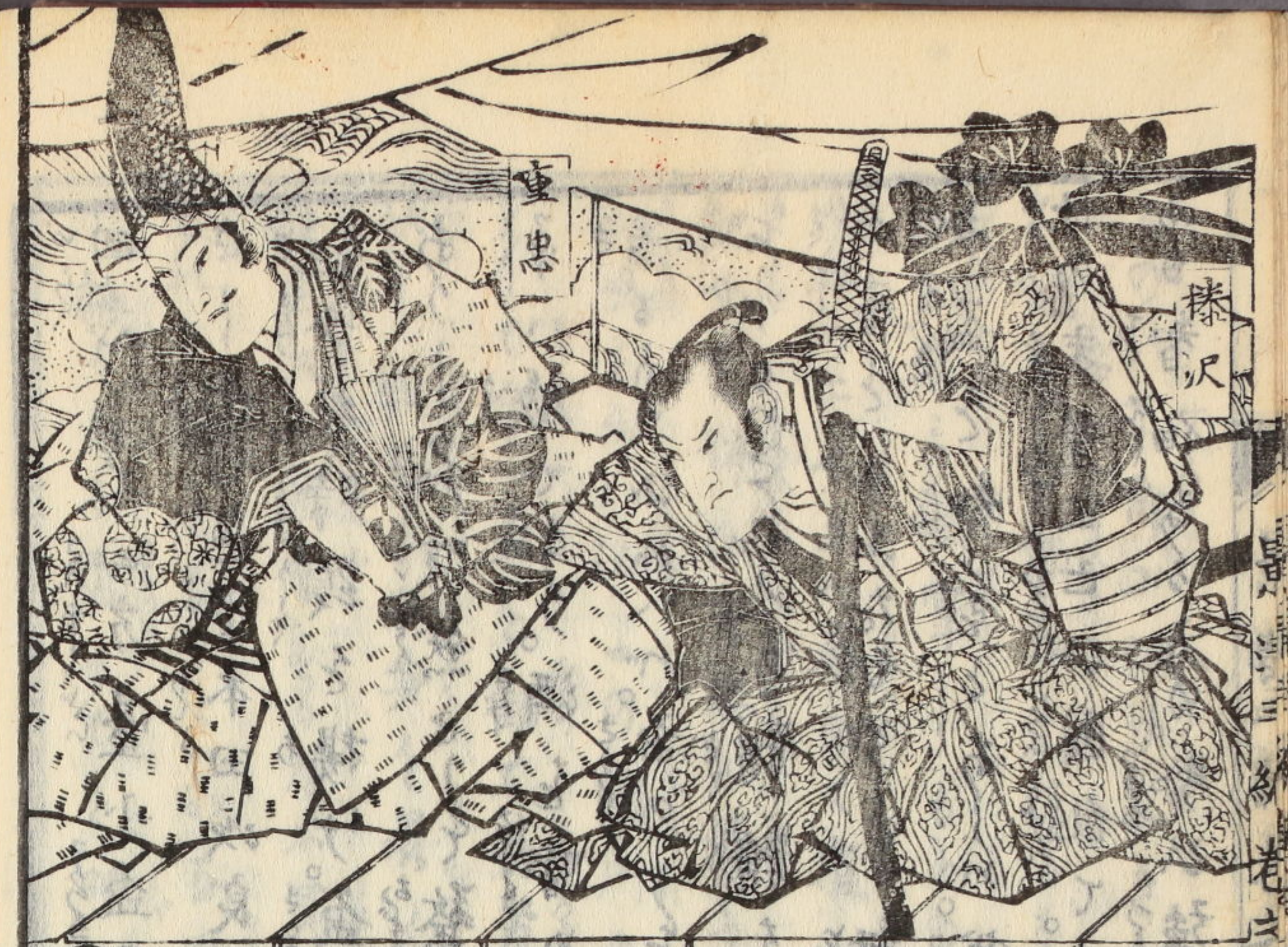
ふてのりふれ。心小くめめりて。思免あつた。彼ホハ
 さらあり。某おでめいりやう。深き思とせんぞあり。と。低頭
 して詫多れば。近経面を和らげて。前の發乱我も君。ま
 及ばせむひほれば。と。制せよとの命をなす。彼ホを諭せを
 ありく。小。我。敵對。奴原。あれ。かむとありて。討とるべく。
 殆り不及んと。あり。を。汝。我を諫め。事故なく鎮あるを
 八。と。ふ。き。手。柄。と思ふ。おま。其。賞。不。換。へ。て。免。ま。を。れ。と。
 始終の光景を。主君ハよく知ま。汝。が。因。へ。り。を。を。
 詳。小。因。へ。せ。て。下。知。ま。り。小。何。せん。と。云。は。か。が。て。座。を。立。て。
 主。重。忠。が。前。小。出。で。職。人。ホ。が。醉。在。尾。籠。紀。女。と。云。り。の。勇。を
 振。ひ。制。し。小。ふ。り。と。れ。小。怕。ま。り。故。なく。鎮。ま。て。今。只。顧。小。

先非を悔ひ。罪を謝。も。る。り。の。よ。し。を。詳。小。述。べ。因。へ。る。を。
 重忠小首を傾けて。暫時沈思の躰。ふ。り。か。か。ら。面。を。揚。て
 云。汝。が。聞。へ。一。紀。女。と。か。ら。ん。そ。も。何。等。の。好。身。あ。り。て。仲。間。を
 背。切。が。為。小。爾。の。方。人。な。し。け。り。を。我。ハ。これ。を。心。得。か。く。と。
 不審問小。近経ハ。ち。ち。り。笑。て。や。す。爾。誣。ら。せ。り。と。事。
 道理とを存。一。の。紀。女。と。い。は。れ。る。縁。故。も。て。去。年。より
 して。英。造。管。の。人。夫。の。中。へ。加。り。り。の。あり。と。滑。川。小。牛
 車。を。援。へ。り。造。管。の。人。吏。を。望。へ。り。細。中。小。語。り。因。こ
 して。重。忠。因。て。ち。ち。然。首。今。日。の。り。免。ま。す。と。あ。り。後。は。も
 我。前。小。酒。を。奉。へ。一。當。時。小。免。れ。を。免。ま。ん。と。云。は。る。言。の
 おん。あれ。故。なく。免。し。と。ま。す。一。と。て。紀。女。と。か。ら。ん。り。

破ふ 謀と
小川 清が
血 濁
忠 骨



景清の物語



重忠の物語

困しめらばぬ。趙襄氏余小思ひ。韓氏と魏氏とを相
 語らひて。遂小智伯を亡し。國を三ツ小分てり。趙襄氏が
 知る所の地ハ。則趙の國あり。趙氏尚も智伯を怨む。其頭を
 漆ぬりふ。これを髑髏盃と号けり。それこの盃の起原あり。
 然る小後倉の右幕下。深き鱒ある。平家を亡し。會稽の
 耻を雪せ多くと。尚かん怨む。暗むやあり。彼趙襄氏小
 做ひ多し。平家大將宗盛の首を漆ぬりして。これを盃と号し。髑
 髏を暗し。其後この髑髏盃をもて。主君秩父のふ
 下し。多し。主君これを秘藏して。平日ハ用ひぬ。ざり。り。
 汝が勇威の光景を。漆く感へ。おがまのあり。秘藏し
 り。盃もて。目今酒を。ゆふぞう。感佩あり。飲之ゆへと。

云小景清熱然と。怒面小顯して。盃を。とて。ち。又つ。拳
 を握り。落涙し。暫時言語を。云。ざり。り。本田様。沢。左。右
 より。い。酒。を。受。が。と。急。た。提。鉞。を。さ。は。く
 ば。景。清。ハ。今。ハ。堪。む。や。思。ひ。人。彼。髑。髏。盃。を。懐。お。し。
 下。郎。の。身。と。一。貴。人。の。前。ふ。酒。を。飲。ハ。畏。と。多。き
 由。り。之。爾。ハ。あ。れ。賜。つ。盃。を。空。し。う。せん。も。又。畏。し。う。り。て
 今。此。盃。を。暫。時。が。不。預。り。ま。ら。し。酒。次。ハ。酒。飲。ん
 と。靜。く。立。て。去。ん。と。其。時。重。忠。声。を。あ。げ。平。家。の。ち。ち。小
 鬼。神。と。人。も。怕。ま。し。士。大。將。悪。七。兵。衛。景。清。と。見。し。ハ。癖
 目。小。よ。も。あ。る。お。ト。云。づ。き。り。の。あ。ら。せ。り。暫。時。と。ち。ち。ち。ち
 と。呼。び。ら。れ。て。景。清。ハ。う。り。顧。て。眉。を。お。は。め。今。孫。余。の。智

臣と呼ぶ。重忠やとあり某を景清ありと見はる。天暗
 の眼力ある。あまり小包む臆病あり。いづれも我こそ景清
 あり。何等の事を云んとて。呼は止めゆいと。臆を色なく
 主戻り。重忠が前小座一くれが。重忠翳を膝につきたて
 故主の爲小身を苦しめ心を勞して復讐の志氣ある
 とそ忠義あれ我君右幕下頼朝。足下の事を聞けり。
 奈何も惜しき武士あれが。説諭して降らしめ存命見え
 とか。おま旨を某小豫て命あり。後倉どの小爾思ふ。足下
 が果報のいよいよ。早く心を繕ひ。後倉殿小仕へ祐と聞
 て景清可くと笑ひ忠臣ハ二君小仕へ。貞婦ハ二夫小更と
 むとや。我ハ平家世々の臣。今主亡ひていりてその。讎と一思ふ

源氏小降ん足下平家小仕一身の義小背ひて源氏小
 降了。忠臣顔とそいと悪し。殊小宗盛の公ハ。父と伯父と
 ハ大々々あぬ。恩を後し小あつむやハ。その大臣どの。體
 體りて。製作したる盃をいと誇が小珍重する。悪逆無道
 の心小比へ我小降を勧むる。不忠とや云ん不義とや云ん
 爾るりの言を聴べきや。我こそ真の忠臣を。宗盛公の體
 體と聞見る。不忍ひぬものから小さてこそ奪ひ去る。し
 止めふせをと主んとそ。重忠靜小景清が。裳裾をとりて
 引とめ。我も素ハ平家小仕へ今も。源家の臣たるを。不
 義不忠との一言ハ道理小似て爾小あつむ。士ハ已さを知る
 めの。爲小死し。女ハ已さを悦もの。爲小容をま。とつ入

本丈のありをがし。初平家小臣事小衆人をとりて遇せらる。
 今源氏小臣たれば。國工をりて遇し。平家ハ世々の
 君ありき。源氏ハ累世主と頼り。恩義もやうて差ひあはれ。
 いひて忠を思ハざるべき。こハ我身の上の事。退ひてまて世の
 人の為不熟く按むる。平家敢てくもびし。是渾天の
 命あつて。そを奈何をとまれば。持平家の世を知る也。
 故小松重盛の世小在り。時ハ其人仁義の心濃く。上を
 敬し下を憐れ。よく其道をまゝしめれば。天これ小景福
 を下し。四海波静て。一門繁榮めでたくなり。世小亡人と
 ありての後ハ。清盛が暴逆ある。宗盛の闇愚ある。諫争の
 道絶ぬれば。驕漫奢侈擅み。法皇を鳥羽におし。龍

皇妃を尼小もる。ふと人の忍びぬ悪逆を。皇天震心
 まし。て。手を頼朝に小かり。つひに逆家を誅し。ま
 爾は今の法會殿ハ。天吏とせ。ヤバくれ。いん平家の臣
 たり。とも。能と思ひて討んとするハ。天小向ひて。唾まらか如ハ。
 討ハ我身小報ひるん。天理小従ひ。縁余との。降参する
 今富山ハ源二位の知臣と人の噂まれば。奈何人々と心あ
 く。思ひし處小今と。めて。其智と。人を覺悟たり。君
 乃の智小あ。で。おのれを利する。智より。其家世く。源
 家小仕へ。恩義を篤稟し。つと平治の亂。義朝。源
 源氏微。つと。平家。ゆく。忽ち平家小媚を。いれ。心を

蒙王まひほれハ。平家ハ朝家の逆臣とある。こゝをりて院宣
 不忠ト。鑑倉どのを助るのこゝらで主を換ゆると云ん某
 重忠ふり朝家不叛くものを見まハ。降るりのこゝを
 免し。叛くりのをいこれに殺せ。今目前平家の勇臣世不
 威名を裏せし。景清を見て逃そまや。前不説鎌倉どの
 足下ハ忠勇多きを慕ひいハあもして降参させよ。これ朝家
 のおん為なりと。宜しきを見まハ足下をりて。申黨と云い
 今より。爾あハ源氏不降る不あて。朝廷の臣と云れ
 るあり。以道理を考て。速く心を決まべしと。説き
 景清小首を傾け。暫時沈思をふしはる。良あて云ふ

くるハ。足下ハ説のハ。熟く心を得ほれとも。我家の平
 家不あなる足下ハ源氏不あなる不異あり。某も同ト平氏
 ありが忠盛公の頃よりして。一門を離れ臣下とあり。他姓
 と均トと奉公せり。同姓とつハ世々の君あり。譬逆臣朝敵
 ありとも君臣の義。變トかて。勅命おもあれ。我主家を
 己そのハ源二位あり。一太刀をりて。怒んと心神とも。小言
 して斯姿を窄せト。不足下ハ為小見。咎せられ。景清
 を知らる。運の極と思ふあり。今頃へハ人更どもを兼こ
 源二位ハ。實不天吏と云べし。爾大將を討ん。こせ
 天誅い。逃さんや。是等の事を思ひぬれば。見頭ハさるも
 天より命。捕へて刑し。さる。更の得失并ふあり。

世に存命ん其くちハ人臣の常奈何せん天を告ぐせざる
 の難報んとさるハ道なきや。今日命助くらバ又謀を
 儲けふして復讐の心欺るあるん。わー源二位不遇失
 あらハ世の累ひとありぬべし。只速不景清が首を刎たまふ
 あらハ世の為我身の為あるが。そや討らばせまうしと悪び
 せしと居らう。重忠始終の光景を見しと関つ居る
 しが。其時不至我回嗟嘆してまうらう。平家不かく忠
 臣ありて敢なく亡び失する。宗盛副君あるらう。賢
 賢ひ侮を愛し。奢侈不沈ま。故をりて其家水のより先
 帝あて。西海の波不没する。悼おしくも憐れま。昔
 豫讓。智伯が為不讐を襄子小報んとて刑人とするて

窺ひしを。襄子知て捉へんと。其精忠を感激し。義
 としとれを釋と関く。我まう足下が忠義を感む。いつた
 襄子不傲ハがらんや。爾且とも足下が意既不決まらう。
 うらハ。釋とも義引おと。前ふ子へ。盃ハ。眞偽ハ免れ是
 角もあき。故主の體體と関らハ。人手小置んハ。忍むる
 あり。臣たるりのまふひふり。いつた精舎あも埋葬し。て
 主君の耻を蔽し。秘と。情の言語不景清ハ。畠山ハ。信義
 のやとを。深く感下て落涙し。今契死を立返バ。生を
 貪り死を怖る。怯弱未練のものありと。誹謗とも主君
 のみ。今釋し。あらハ。考場を脱色。契體體を心
 のあらハ。埋葬せん。後日。源氏の為。不擒あらんハ

必定あり。其時ハおひかあへて。足下ガ手ヲ捕まへ人再會の時今日。礼を中回へんと。頓首志つて立出るを重忠入る不意氣揚くと。英雄の風姿あれが。深く嗟嘆し遺すまけ小茶許回轉御。仮屋の奥あぞへみたり。契譚小重忠。宗盛ガ髑髏盃として。景清小よへへ素是真物小あつむ。前本田重忠小。雇夫のくち這般のりの。乞て立入いと告。重忠これを見清ありと。猪しぬれども名乗後バ。其實否を知らぬ。あぬ人の髑髏りて盃小作里なして。これ宗盛ガ首ありと。景清を欺きし小。謀りし小。差ひびいて。自ら景清ありと名乗入り。重忠の賢ふりて。髑髏盃を玩弄す

をき。只是一時の謀の。契履歷譚中ふまべられと。混亂して説話の妨まらハ。あふおして并ぶるおとせ。

第廿一回

錦袍を刺して忠良志を果せ
教訓を遺して貞婦貞を全

且説悪七兵衛景清ハ白山の重忠と。袂を別ちて。永福寺を立出て携外の髑髏盃をとり出し。熟くとちんじら。年經しものとおがしめて。滾塗の野々。元損してあり。なれば。この誦しき物あるうた。故大臣宗盛卿亡ひまひて四年あり。これ我年を経ぬると認め。是と彼とを思ひおをま小。頼朝世を知ろをためあて。壁へ雙人の首ありとも。飲界小作る。残忍の挙動をしして人心を失ふべき

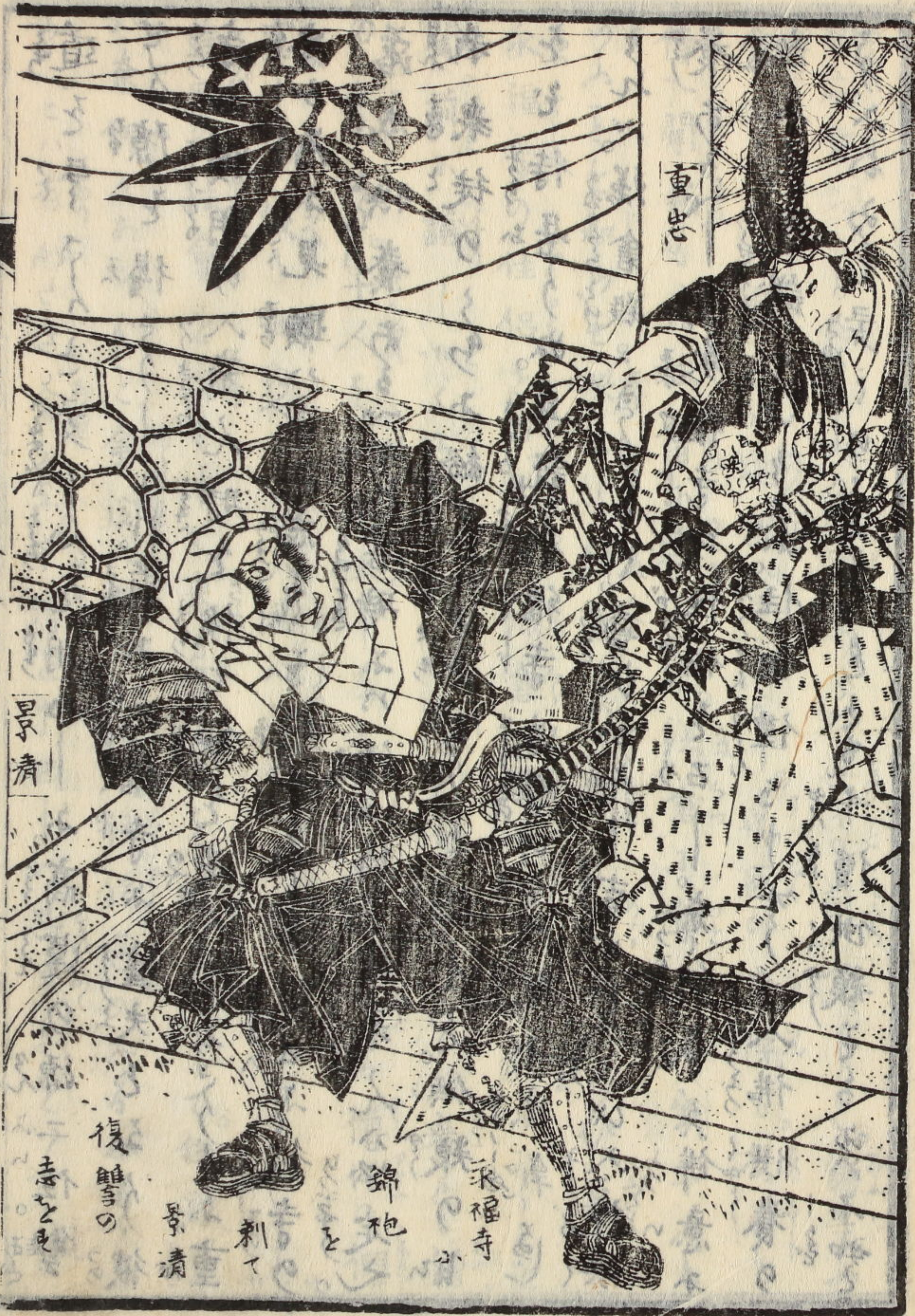
人小あつても。猪多小重忠。智者多れば。其姿を奪せしを。
とくより知つて。我口はくら。景清ありと名告へき。為不得知
らぬ。髑髏として。大臣との音そと。我を欺き。実名を名告
し。おとお心へたり。こころほりむして。熟くの彼が。謀小諂
ぬこそ。易からぬ。今さら悔ゆる不詮なきよ。そハキきられ
夜初も。主君の御首と名付し。路頭小捨人ハ忍ん
ふと。只ある寺院小携行き。埋葬の宮ありて。其後
その身ハ。総倉近き。喜瀬川と云所。忍び居て。世の光景
を。盛小窺ひ。るる。盛小。総倉の繁栄。日々小盛ん。小感
權月。小増王。昔平家。彼宦の徒も。今ハ。契所小會集
け。總倉出頭の徒。小媚をいれて。膝行し。利録を索

めんと。さるりの。多し。景清。契等を見聞し。懐
坐小確して。榮枯得失。斯や。不移。是替まる。りの。多や。
我主家。盛人の。少時。頼朝ハ。流人の身。誰り。これ。を
顧たる。今ハ。それ。不引。更て。日本國の。人。が。源家ハ
姻と。結んと。契。源倉。小集り。來て。便宜を。索て。源二位。小
媚を。いれんと。競多れば。昔平家の。恩。澤。不。身。を。浴
たる。りの。ども。今。平家。さ。ぬ。の。人。と。同。け。ハ。情。ハ。け。で。あ。り
なり。ふ。これ。を。捕へ。これ。を。訴へ。源氏。不。忠。義。な。て。を。し。て。
かの。う。榮。利。を。營。る。いと。淺。穢。し。き。心。ろ。奈。平。家。元。ハ。て。ら。や
五年。夏。く。の。月。日。を。過。ま。ら。ふ。為。不。變。を。報。ん。と。さ。る
りの。あ。き。を。取。う。し。た。れ。我。不。肖。多。り。と。い。ふ。と。臣。た。る

人小ありも。猪多小重忠。智者多れば、其姿を察せしを。
とくより知つて、我口はくら。景清ありと名告へき。為不得知
らぬ體。大君とのく首そと。我を欺き、実名を名告
し。おとむ心へたり。こころはらむして。熟くの彼が謀小諂
ぬとを易からぬ。今さら悔ゆる小詮なきよ。そハホきられ
依初も。主君の御首と名付し。路頭小捨人ハ忍を
下と。只まる寺院小携行き。埋葬の宮ありて。其後
その身ハ。後倉近き。喜瀬川と云所。小忍び居て。世の光景
を。盛小窺ひ。見るぬ小。後倉の繁栄。日々小盛人小感
權月。小増王。昔平家。彼宦の徒も。今ハ。契所小會集
け。後倉出頭の徒。小媚を。つれて。膝行し。利録を索

めんとさる。りの妻。景清。女等を見聞し。懐旧
坐小確して。榮枯得失。斯あり。小移。替まる。りのあや。
我主家。盛人の。時、頼朝ハ。流人の身。誰これと
顧たる。今ハ。それハ。引更て。日本國の人。が。源家ハ
姻。結んと。契。後倉小集り。来て。便宜を。索て。源二位小
媚を。つれんと。競多れば。昔平家の恩。澤不。身を。俗
たる。りの。ものも。今平家。さぬ。の人と。同け。情ハ。け。あ
なり。ふ。それを。捕へ。これを。訴へ。源氏。不忠義。な。を。して。
おの。う。榮利。を。營。つ。と。浅。穢。し。き。心。な。平家。元。ハ。て。や
五年。夏。く。の。月。日。を。過。ま。ら。ふ。為。小。雙。を。報。んと。さ。る
りの。あ。き。を。取。う。し。と。れ。我。不。肖。り。と。い。ふ。と。臣。たる

景清三編卷之二



景清

復讐の

景清

刺て

錦袍

永福寺

重忠



重忠

道を号しんと。其の心を以て高運の源二位。彼
せん隙を得たり。前永福寺の雇夫とあり。彼
寺に頼朝の入来ん時を俟て。雙を遠人とあつり。重
忠が為不見顯はされ。志氣を得たり。近日は彼寺の
落成供養あるべけれ。其時ハ源二位の諸来人の必定之
我衆徒のくろふ給と一太力ありと。恐んと。供養の日
を待居りぬ。且説永福寺造堂の事。既成就し
れば。鑑倉殿ハきりなく。喜びおが。吉日を卜ひ。入佛供
養あるべし。永福寺の住侶を召し。奈何る。佛意不
拵ふと。會議のひくふ。住侶僅でや。入佛供養の
事ふかめし。其のころも。千僧供養も。其の不知と

回心。雨あつた。其の計ハべし。諸寺不
會する。斯まは遠國ハさらなり。遠國の寺院も。其を
傳へ聞。我も其法會不連んと。鑑倉不集。僧家千人と
つふことを知らむ。其より鑑倉の。聞し召及び。再び
永福寺の住侶を召。其程鑑倉不來る僧。千餘るより。を
聞前不議。如くして。千僧供養あるときハ。く不來る僧
のくちより。千人を撰び。出らん。爾あれハ残る僧侶の們
空しく。飯り去ぬ。そハ我心不あり。願くは。くくと。
這回の法會を志さして。來るものを餘さざりて。供養せん
ハ奈何らん。會同へ。いれ。住侶喜びたるあり。ち
り。こハ有か。き會。千僧とせし。其其きを。り

おて。實ハ限リありらんをせ。いと目出なき由りあれと。由回
 忘ナされバ。とよなく喜びおほし。其月某日ハ。家上吉日
 あるより。陰陽の博士ホガ。其程中聞へは。其日不供
 養をべたれば。準備をふまへ。と。何れのり。細中不命。會
 るい。りバ。住侶ハ畏之領掌。一。頓て。其前を退出。頃ハ
 文治五年の秋。八月某日ハ吉日。とて。永福寺入供養ある。
 豫々。儀念より。余あれバ。其程この。儀倉。不参。王集。一。諸
 國の僧。威儀を整へ。我も。くと。永福寺。入來。と。景清
 ハ。其。を。傳へ。聞。り。と。よ。ふ。く。喜。び。豫。々。思。ひ。儲。け。ま。バ。
 警固の衆徒。不扮。打。て。永福寺。不。を。踵。り。々。其。粗。急。と
 されバ。下。ハ。萌。黃。の。腹。卷。一。上。ハ。黒。き。法。衣。を。穿。袈。裟。

して。作。し。頸。巾。を。頂。き。腰。間。一。口。の。神。刀。を。佩。手。不。大。難。カ
 を。雙。たり。如。斯。身。を。窄。し。門。と。堂。との。間。不。イ。と。儀。念。殿
 の。來。り。人。を。今。ヤ。く。と。待。程。不。午。の。具。吹。頃。不。至。り。儀。念。殿
 の。そ。と。せ。あ。り。と。人。く。さ。り。め。き。ま。纒。ぐ。不。程。由。あ。ら。せ。む。頼。朝
 卿。衣。冠。を。整。へ。り。き。り。人。供。不。候。せ。り。ハ。這。回。這。當。の。奉
 行。されバ。畠。山。重。忠。真。前。少。を。進。ん。たり。其。外。北。條。和。田
 三。浦。十。葉。工。藤。を。始。と。して。近。習。外。儀。の。大。名。小。名。威。儀
 嚴。重。不。供。奉。ふ。せ。り。儀。倉。殿。の。由。馬。永。福。寺。の。門。不。入。人。と。ま。り。
 時。怪。し。ひ。く。ふ。此。馬。儀。然。と。して。躍。狂。ひ。一。歩。も。前。へ。進。ま
 ぬ。バ。供。奉。の。面。々。驚。き。惑。ひ。と。何。故。不。由。馬。の。斯。致。馬。ま。は。さ。る
 中。ら。ん。と。各。く。訝。る。その。中。不。重。忠。四。方。を。望。見。て。微。不。声。を

高たか中ちゆうふふ。彼かれ呀や不ふ見みゆゆ警けい固この僧そうの萌も黄わう腹ふく巻まふふ。たたるるののをを。捉とらへへてて其その呀や。牽ひべべししとと。焦い燥れてて下した知しをを傳つたゆゆ。儼げんてて非ひ常じょうの備そまのたためめ。箕よ尾の谷や四よ郎らう國くに俊しん五ご百ひゃくの人数にんず引ひ俱ぐしてして。其その呀や不ふ衛ゑててありあり。今いま重じゆう忠ちゆうが言こと語ごをを聞き。曲ま者ものかららトトとと人ひと數かずををゆゆ。彼かれ僧そうをを取と困こたりたり。其その僧そう是ぜ別べつ人にん不ふああららむむ。惡あく七しち兵へい衛ゑ景けい清せいがが。今いま日にち其その呀やああてて錫しやく倉くらののをを討う奉ほうんんとと吹ふ女にょをを窄せまくく。警けい固この僧そう不ふ扮は打うちありあり。景けい清せいハハ今いま更さら不ふああとと重じゆう忠ちゆう不ふ見み咎とがりりらられれ。運うん命めいとと思おもひひしし。我わが力ちからの及およんんふふ。斬きる靡みららししててああははよよくくハハ。頼より朝あさをを討うんんのの前まへ不ふ躍あ出で持もちたるたる薙あ刀たま突つままてて。今いまハハ何なにををらら包つむむぶぶきき。平へい家けのの内うち不ふ肅さくるるのの。あありりとといいのの。儼げんとと知しららつつらんん惡あく七しち兵へい

衛ゑ景けい清せいととハハ某なががるるあるあるももやや。主ぬし家けのの雙たわあるある頼より朝あさをを討うんん日ひ只ただ今いま討うんととてて。斯かくハハ形かたち容ようをを窄せまくく不ふ見み咎とがめめらられれししをを念ねんふふ。我わがとと思おもいいんん人ひと々々ハハいいづづかか寄よりめめ一ひと某ながが。手てああるるののああととをををを握にぎりりとと持もちたるたる薙あ刀たまをを振ふるてて。寄よららババ斬きるんん光あ景けいありあり。時とき不ふ箕よ尾の谷や進しん之の出で。ああららががららししややりり不ふ景けい清せい。指さ油あぶらのの戦いくさハハ。勝負しやうぶをを分わでで別べつふふ。箕よ尾の谷や四よ郎らう國くに俊しんををよよもも見み忘わすれれ。ををよよししききふふとと。云いひひらられれてて景けい清せいハハ瞳とまををささごごめめ熟じやくくく看みいいつつもも覚おぼええしし。國くに俊しんハハ檀だん浦うらああてて我わが為ため不ふ頭あたま教しやく釜かま簾すだをを断たらられれ。そそののままがが取と辱ちをを墜おんん。思おもひひててのの見み泰やすらら。優やさししききのの心こころハハ。他人た人にんよりよりハハ望のぞままししきき。敵たかめめどどごごさんさんあありり其その呀や去さままししてて戦いくさハハ。後のちとと携た薙あ刀たま臆おそれれとと風かぜををああららししてて斬きるてて蒐くままババ。箕よ尾の谷や

景清と其の事

一)

恥ある敵。他人の譲らんと刀をまわして對ひ合せ上
 段下段の秘術をそく。人交りせむる百合あり。奇く敗く
 の術を顯し。必死ありて戦やとふ。つきの時り勝負を
 見んと。源氏の火勢眼を放む。片唾を吞んで眺居る時小
 畠山重忠ハ二人の戦ふ光景を。敵前よりして窺ひ居る
 しが景清が勢ひの益盛んふして。國俊が刀法ハ漸く小乱
 て見へれば。今ハ援つてあらしとして。搦込本田を敵小招き。
 汝ホ急し兵士を率て。景清が殿を討て。相うあへて生捕を
 一と。云聞こゆれば。西人の心得とるると兵を將て突搦刺叔
 鉤繩あんとは各手小得。ものを雙へて。景清と國俊と戦ひ
 居る後背より。討てかまはば。景清ハ尚も精神益増ておな物

りのしき奴原うま。つてく。物を見まべしと。蝶鳥あとの飛ぶ
 とく。四方八面小當り。薙刀ありて薙まらる。万夫不當の剛勇
 士。今日を限りと身を厭む。必死ありて戦ふぞ。さしりりの
 大勢敵がごとく。箕尾谷とどめ。本田搦込。四度路ふあつて延
 付得む。景清ハ嘲笑ハ。今日日本國におぬ。鎧舎とのとて怖れ
 らるるを奈何ある人と思ひし。其馬前ありて某小奴向人即黨
 あきとりり。聞し。小芥。甲斐をさふ。打物とりて。神
 と呼ま。北條土肥。孫父三浦千葉。梶原工藤。共ハ今茲に
 在らむやあるな。我勇壯小恐怖をあり。尻むとさるうと
 飽むをふ。取らし。罵らるれと。誰一人名言らけて。雌雄をふ
 きんと云ふ。時小畠山庄同重忠。馬を靜小乗出。

景清公對つて云つりける。大丈夫の言語空しくらるる。再び
 中ので姿を窄し。今日勢所あて鑑倉殿に。鑿せんとする忠義
 の志いつて空あきまべきと。身不肖ながら其重忠君に代て
 戦ん。勝負ハ時の運ありて。何まが勝。何まが負と。定りたる
 きるあがら。我撃負て死するとも。尚這裡に。猛將勇士。
 星の如く居並べ。暮ハ衆不敵せむと。足下鬼神ありとも。
 勢所ハ命を落さる。爾あは家朝の。こを云遺人方も
 あま。足下が忠義を感じるあり。今聞へるが良等志
 て。必ま角り得まべし。と。例て景清感激し。敵あがらも
 頼む。志氣こせ。嬉しけれ。斯と覚悟を極し。つら
 今世思ひおくとあり。と。回志ハ重忠首を擲。ワヤと子平

家の嫡たる。六代御前。前年虜とありて一命の危し
 かり。を高尾ある。文見上人嘆き。中て。僅ハ命助りたり。
 失ふ。平家の人々の。主君と思ひ。六代を君と。思ひ。ひま
 や。汝が心の迷ひ。六代御前の苦難の。覚束なく。お
 け。よ。よく心して。回志を。私と。云。景清嘲笑ひ。重忠の
 け。似げなき。言語。一旦助命あり。公達。我故を。りて。おん
 身の。く。難義を。けんと。做る。是ハ。小人の。野。あし。く。
 天。束。なる。源。二位の。い。で。あ。る。あ。ま。き。や。を。免。れ。角。あ。れ。
 大夫の。志氣。決。ま。る。あ。と。ん。動。ら。ま。り。あ。ら。ん。重。忠。完。念。
 ざ。ら。ち。笑。ひ。い。ち。よ。爾。の。あ。ら。ま。孤。の。六。代。御。前。
 然。る。べ。き。人。あ。ま。き。と。死。い。不。良。の。や。出。来。ず。我。と。禍。招。人。と。こ。れ

我老婆心をもりて。云。関へけるる。あるそや。その後てより議
 か。わ。つ。ふ。是。彼。え。ん。と。い。と。く。無。益。の。り。あ。れ。ば。い。さ。や。勝
 負。を。遂。ん。つ。と。腰。の。刀。を。抜。放。ち。撃。て。か。つ。ま。い。景。清。も。難。不
 ま。い。く。對。ひ。合。せ。十。合。あ。り。戦。へ。ど。も。さ。ら。不。勝。者。ハ。又。さ。り
 多。り。時。不。景。清。過。失。て。木。根。不。躡。き。俯。伏。不。地。上。不。撲。地。と
 倒。れ。り。其。時。重。忠。刀。を。と。り。め。躡。躡。び。い。の。を。撃。ハ。死。る
 人。を。撃。不。均。し。我。ハ。這。般。の。り。の。を。殺。さ。ま。起。上。つ。て。勝負。を
 せ。よ。と。馬。を。乘。居。扣。と。景。清。固。て。感。伏。し。起。復。て。地。上。不
 座。し。數。万。の。猛。軍。あ。り。と。も。臆。を。び。不。あ。ら。後。ど。も。仁。義。の
 士。ハ。敵。し。か。し。斯。不。と。の。人。を。臣。と。ま。る。蟻。倉。よ。り。出。不。是
 天。助。の。君。と。り。べ。し。を。を。雙。ふ。と。は。け。硯。山。そ。ら。あ。ま。我。ハ

猿。猴。の。水。の。月。ハ。速。び。あ。ま。風。志。ハ。と。も。果。ま。す。か。ト。
 爾。ハ。と。て。存。命。君。る。と。き。へ。人。の。臣。な。る。常。あ。ら。ハ。雙。を
 み。ま。く。過。不。ん。や。薄。命。の。身。め。存。命。て。不。忠。の。名。を。や
 負。ぬ。べ。し。今。日。突。所。不。潔。よ。く。命。を。縮。不。志。く。ま。と。既。不
 自。害。と。見。へ。ふ。り。頼。朝。公。ハ。最。前。よ。り。始。終。の。光。景。を
 御。覽。し。何。の。御。説。も。あ。り。し。か。以。時。傲。不。重。忠。不。對。を
 少。ひ。景。清。死。を。と。く。止。め。し。一。彼。ら。忠。義。の。光。景。ハ。晋。の
 豫。讓。不。彷彿。なり。その志氣を奪ふせんハ。い。つ。不。便。あ。ま。る
 不。ら。ま。や。よ。り。て。趙。氏。が。故。り。不。傲。し。て。忠。義。の。志。氣。を
 果。さ。ま。べ。し。と。い。ひ。ひ。て。百。なる。将。衣。脱。き。多。ハ。景。清。不。そ
 賜。ひ。たり。景。清。と。り。て。不。一。戴。き。と。ハ。喜。ハ。し。の。賜。物。う。あ

加保目出たき大将を。雙と硯へと志氣。遂む空しく死
 んとを。憐れとわほして斯のどく。計らひせり。一
 さふ。契年月の思念の程。今てせり。暗る時ありと。つひに
 腰小佩を。瘧丸の太刀。抜發ち。前たちり。一門を
 靈あらば。聞し。せ。今日目今。契所ふし。御雙源二任頼
 朝を。悪七兵衛景清が。怨を報ゆを。覧せよと。瘧丸を
 りて。狩衣を。我刀とふく。刺貫き。寸く。不切裂て。今そ宿
 志を。遂なれば。今世小思ひ遺る。いと。瘧丸逆手。不持ふ
 ち。胎腹を。断んと。も。鎌倉殿。慌忙く。中よ。待景清云
 る。あり。汝思ひを。暗し。ければ。臣たるの。義に。立べ。れと。
 我世を。治る。任ふ。ありて。目前。忠義の。武士を。我ふ。雙と

ものありと。自殺を。免む。ハ。偏仇。おて。いり。で。心。不。快。より。らん
 汝が。忠。由。我。任。も。全。くら。ま。る。一。事。あり。心。を。収。めて。美。是。平
 家ハ。廣。き。一。門。ふ。が。ら。い。ハ。不。朝。敵。を。れ。バ。と。て。壽。永。の。亂。不
 種類。を。辱。し。西。海。の。波。不。沈。没。し。傳。ふ。遺。る。ハ。六。代。の。今
 文。覚。の。徒。才。と。あ。れ。バ。後。あ。失。ハ。一。門。の。後。世。を。吊。ふ。を
 くれ。も。尚。つ。ま。ざ。い。と。初。雅。を。れ。ち。や。誰。う。人。の。追。護。供。養
 る。ま。りの。あ。る。人。汝。真。實。の。心。を。存。せ。バ。今。より。浮。屠。の。身
 と。ありて。主。家。の。冥。福。祈。ふ。バ。現。當。二。世。の。忠。臣。な。らん。と。く
 よ。く。心。得。ふ。じ。と。仁。愛。篤。き。大。將。の。命。ふ。斯。有。め。き。大。將。を
 感謝。の。涙。咽。け。お。ふ。冥。加。ふ。の。命。ふ。斯。有。め。き。大。將。を
 雙。と。思。へ。る。愚。さ。よ。今。日。夙。志。を。遂。さ。し。ひ。又。更。不。道。理



ある。利害を論しう入る。それを乗くハ癖あり。
 存命べき身あらねと。一回ハ命ハ随ひ古び一主家の
 冥福を。祈るらん去るが。鎌倉殿を目前ハ見やらせられ
 復讐の思念止るす。免角なる眼のあらんを。
 ありくハ勝あらぬ。と云よりそ。志丸りておのれと双
 彫抜ハ鮮血流くと。流出萌黄絨の腹巻も忽ち朱
 小染りたり。鎌倉殿を始として。附従へる人らも。この
 ならくをみるようも。これ無残なりと果然たり。鎌倉殿ハ
 不便とかほく。忠とついつ美とついつ。傭女も勇夫の
 所為。惑むるハ尚余りあり。重忠彼を懐恤て療養せし
 得るまで。平愈の後ハ心のま。何地方ありと住家さす

を。景清ハ心ハ頼朝が令の届く所ハ必む忌嫌て居ら
 くと云んぞ。その道理ハ不通あり。普天下何れの地方も。源氏
 天子の御國あり。其るすよ。諭さしと。おちあき出談を
 重忠ハ感激して奉。景清ハ對ひて云へり。今我君の
 宜ハ出談をいふハ聞けりや。これより。經ハ我許ハ誘引行と
 療養せん。其るす心得けしと。云ハ景清首を掉出談いふハ
 兼王ぬ。忝き命あらば速ハ志まされと。前ハ云某ハ平家
 譜代の御黨あるハ源家の人ハ養れ。其身の療養ありし
 するハ心ハこれハ耳んせむ。中上る畏とされと。源家ハ雙
 のあれば。渾某が如くあらん。今までの山下知ハ。西へきくハ
 西へかりき。ハ其を憐れむ。只尋常の罪人ハ。病るハ微ひ

獄ひらひて。傷きずの療治りょうぢをぬく人ひととて。明あきらけき惠めぐみとて。道理道理を
 尋たづねて述のたまふを。強たか倉くらとのハ固かたくしめし。人ひとをも我われの義ぎを害がいせ
 ぬ。而しか全ぜんのちを感かんありて。景清けいせいが言語げんご道理道理也なり。重忠ちゅうしゅうは宜よろ宜よろ
 しき不ふ奇き人ひとべしと宜よろいも。不ふ重忠ちゅうしゅう命いのちを心得こころえて。景清けいせい不ふ藥やくを
 与あたへ多おほくこれをも保たもつ。郎黨らうたう本田ほんだ二に郎らうを。して伴ともハハ。以もて
 所ところを去いしぬ。さて今日けふの奉行ぶぎやうふれば。入い佛ぶつ供養くやうのるを。おらあく
 取行とくへバ。君きみは喜よろこひ絶たえ。あつども事果ことて。后のち選せん卿きやうありて。重忠ちゅうしゅう不ふ物ぶつ
 多おほく賜たまへ。造ぞう管くわん供養くやうの契せき功こうを重おもく賞しょうし。あひたり。且また説せつ本田ほんだ
 二に郎らう延えん經きやう。主しゅ君きみ重忠ちゅうしゅうの命いのちを稟りやうて。假かり粧じやう坂さかあつ。土籠つちかごへ。景清けいせいを
 誘いざなひ引ひ入いれ。只ただ願ねがひ治ち療りょうを加くわへし。漸おそく不ふ懈けんる。あつども。本田ほんだとよあつ
 喜よろこびて。去いりゆからむ心こころを用もちひ。必かなく保たもつ病びやうあつども。そゆへ。景けい

清きよを。して土籠つちかご不ふ入いり。残ざん忍にんのどく不ふあれども。され重忠ちゅうしゅうが
 好意こういありとぞ。九く又また傷きずするもの。假かり不ふ風ふう不ふ觸ふま。破やぶ傷きず風ふうとて
 再また生ま志しがさき。疾はやを受うんるを。恐おそま。土室つちむろゆて。風かぜを防かぎり。をべく。
 斯かハ計はかりらひ。つらとふん。不在ふざい話わ下げ再また説せつ景清けいせいが妻つまの阿古屋あこや夫おとこ
 景清けいせい没ぼつ眼がん的てきとふり。假かり粧じやう坂さかあつ。土籠つちかご不ふ繫つまぬ。と街まちの風ふう
 を聞きく。悲かなし。さ。か。か。く。あ。く。せ。め。て。一ひと目め相あ見みあ。く。兄あにト。二ふたと。議ぎ
 せ。れ。と。も。兄あに弟ていとも。不ふ明めい白はく不ふ強たか倉くらの地ち不ふ踵かかとに。か。く。あ。ひ。て。獄ごくの
 る。あ。れ。ハ。述のたま寄よ人ひと義ぎも。不ふく。千思せんし万患まんわんを。費つや。もの。と。嘆なげき。ハ。日ひ々
 不ふ増ます。多おほく。十三じゅうさん由よし人ひと九くも。思おもひ。ハ。同おなじ。り。あ。り。て。日ひ毎ごと二人ふたり額ひたいを
 寄よし。泣なく。外との。る。そ。あ。き。か。る。嘆なげの。重おもく。て。阿あ古こ屋やハ。あ。さ。き
 二ふた病びやうと。あり。今いまハ。食くな。不ふ進しんす。後のちハ。十三じゅうさんハ。驚おどろき。愁うれひ。妻つま。く。と。ま。つ。を

慰まこと漸く弱しゆくふいとけあなれど人丸の賢き性して
 母が病重かりあるを只顧嘆きおとしけく。母の枕を離
 むして台夜者病おとくりあし。十三も深く患ひ心のあざり
 醫療をうけし。神小弗小祈まきも。些の強もあらずして日不
 そひてた弱しゆく。阿古屋も今の救命頼と女く想ひしうが
 重き枕をもちけけ。兄と女児を近く招き涙をそらくと流し
 て云。さうぬご不旅路ハ心憂りのある小平家花洛を落ちりひ。
 良人別きて今年まど。詛指かづつしは。八年の間旅住居
 をし。兄上の力よりて。憂を暖きて恙なく。今日あて存命居
 るる。今一回良人逢ひ。後免も角もあつて人と心を鬼に
 せんともと思ふ。羨勢も不置。今病病不かりてより。日おそひ

心細しゆき。迎も助る命不わすを。良人も頓て誅せらるる。爾
 あれば互小黄泉めて。見参せんと思ひぬれば。あつて一期
 を急ぐ。一身ハ斯と覺悟し。はれと心おわろる人丸のそ
 八年の間艱苦不逢ひ。今父母別去あつて。さう力なく泣し
 かにん。いふ小兄上。今年月こよなき。慈愛を蒙りて母子恙
 なきを得。其鴻恩を露をり報ひまらまらり。ゆふなく。身
 さきたちり。いと心苦し。これ由過世の因縁と。免さ
 し。兄上。尚ま頼まらる。女児あての人丸あり。父母も
 なき。孤の。おん身の覆庇およむ。いりて。人丸といふ。い
 今まの。いふ人丸を。最愛して。いひ。千部万部の経読
 あり。奴家かたけ。いひ。あき。後世の菩提。いふ。か

かき口説はく嘆き閑ゆふ十三妹が心裡猜まるゝと哀さふ
 て坐涙ふくきられし。鼻うちらみて回志多る。濃くあ物を
 葉トのひそ。某素より子を持む。子あも姪も二人とあき
 た一人ある入丸をいりて。廉畧あまをへまや。その今日あも某の
 所をりて知る。爾々のるを苦小思ひ心物を物ふ物らし
 て二病怠るるをのぞ。計りあくと論されても。逆由生へき命と
 思ひよか後ば人丸が顔ほくくところあがり。やよ人丸よ其母
 かくる病ふ今ハ名や。世不頼さあき身あるそりし。今年おとし
 十あるふ親の欲目り知ら後ども。尋常の小女子より賢く
 もえゆるるのうら。母の終辱ふあき身をいふとめて忘れあせ
 叔父内のおとを最愛する。今ふ始ぬるあれが。其身夫は

後ハいと不便を加へらん。おとも叔父内を父母と思ひ孝行
 引しまらまべし。成人の後奈何ん人の妻ともあまぐさど
 必む源氏の人あ嫁しど。父内ハ平家のおん内不忠勇義烈
 傳あき。士大将景清の。雙の妻とあるときハ。父内の名をも
 下まあり。やむとふくが横佩の大臣の姫の跡を暴ひ尼法師
 と姿を變へ西海あて夫のひ。一門を始とし。父母親屬亡
 人の後世を吊ひひら。嗚呼薄命我兒やふ。幼雅身あて八
 年か間。憂族住居小身を苦しり。人あまぐさの初遊ひえるも
 あき身の果を尼法師あもあれし。とハ維面母の教へを。怨ん
 るぞ方見多れ天下ある四民の。うちハ羨む武士の女と生れ
 加保あれと。その武士あるがゆふ。浮世の義理の破られ後

斯ハおしえを遺さどじ。それを思へばあうく。不農工高の羨
 ましと。我子とひしと拍きしり。よくと泣くや夜の鶴子
 への聞ぞ衰まあれ。とも音不啼や雛鳥の人丸涙の隙
 ようりて。この衰一の命うま。年頃父上の在まきぬを不
 去端く。世間の童子が父母不。撒知橋をえる。毎不羨し
 悲しくて。袖を湿し。とどろく。と母くと叔父君の。おし
 まさをりて。慰し。今母人。不別とあ。何を慰と。樂して
 いうで。存命居らるべき。叔父君の宜ま。人どく。心を慰め。くま
 里をぬし。ま。病ひを痊し。ぬ。遠き所の醫師あり
 とも。奴家往ひて。薬ををひ。道州もろ。で還り来く。
 よく調して。ま。らせん。契り。聴し。ぬ。れと。いひ。さし

はくも。よくと泣く。声の刷へて。母阿古屋。苦痛。小眼を
 昏たりし。が。重げ。不ひ。ら。き。を。ら。く。と。涙を流し。ま。な。れ。ば
 と。母。不。力。を。添。ん。と。て。初。氣。あ。も。孝。行。ろ。言。語。を。聞。を
 蓋し。さ。ふ。奴。家。も。死。と。思。へ。ど。も。今。ハ。の。ど。不。得。し。れ
 ぬ。病。苦。不。迫。ま。が。扁。鵲。の。藥。あり。とも。甲。斐。あ。ら。し。ト。意
 の。我。子。名。残。お。し。の。兄。上。の。と。云。声。も。杜。野。不。ま。な。く。虫
 あ。く。で。よ。と。細。く。聞。へ。る。十三。妹。が。光。景。を。見。る。不。目。も
 ら。れ。心。も。消。へ。る。さ。く。を。ろ。の。胸。を。ら。ち。入。丸。よ。く。も。い
 け。ら。む。阿。古。屋。よ。坊。児。を。不。便。む。と。思。心。を。鬼。お。し。て
 藥。餌。を。用。ひ。今。一。回。本。服。あ。し。て。入。丸。が。身。の。ふ。り
 ゆ。き。を。え。ふ。か。し。と。よ。と。阿。古。屋。ハ。断。未。の。苦。痛。不

草^{クサ} 迫^{ツク}て回^{マワ}る志^シなく兄^{ケイ}と女^メ児^コの顔^{カノ}を^ミる。目^メの^ハ涙^{ナミ}の
露^{ツキ}の身^ミの消^キへてそ^ノろ^クなく^ハあ^ハる^ハも^ハ人^{ヒト}の^ミあ^ハる^ハ
さら^ニあ^ハる^ハも^ハい^ハむ。十^{ジュウ}三^{サン}人^ニも^ハ諸^{シヨ}共^{トモ}ふ。相^{アイ}別^ワ離^リ苦^クの悲^ヒし
さ^ハハ心^{ココロ}亂^マる^ハを^ウり^テお^テ。後^{アト}ヤ^ヤ犹^ナも^ナり^テ。流^ナ涙^{ナミ}
こ^ノぐ^キを^ウ嘆^ナし^ハら。道^{ミチ}理^リを^セめ^テ。憐^{アハ}れ^ハあ^リ。十^{ジュウ}三^{サン}ハ^ハさ^ニも^ガ漢^{カン}
子^コあ^リ。且^ナハ^ハ絆^ハの道^{ミチ}理^リを^弁へ^おれ^バ。皆^ナ時^{トキ}く。不^フ
覺^クの嘆^ナを^取ら^ひて。入^ヒ丸^{マル}が^なげ^きを^尋ぐ^ハ。謙^{けん}
ふ^ぐと^や妹^{イモ}の^室。室^{ムロ}し^き屋^ヤを^収歿^カん^と。思^{オモ}ふ^ハ當^{タリ}
時^{トキ}門^{カド}の^戸を^おと^く叩^{たた}く^ハあ^るよ^を。折^{オリ}お^しる^ハも^ハ
と^詮ま^べあ^く。十^{ジュウ}三^{サン}志^シ門^{カド}回^マる^ハも^ハ。門^{カド}の^下ふ^ます^ハも^ハ
今^{イマ}契^ケ象^{ゾウ}ふ。諸^{シヨ}来^キる^ハもの^ハ。是^{コト}ふ^ハ。何^{ナニ}等^{トウ}の^ハひと^トも^ハ。

次^{ツギ}ノ^ハ卷^{マク}ノ。説^{セツ}話^ワを^もろ^をを^聴て。知^チる^ハも^ハ。

景^{ケイ}清^{セイ} 松^{マツ}の^ノ標^{ヒラシ}三^{サン}編^{ヘン}卷^{クワン}之^ノ二^ニ 終^{ハシ}

景^{ケイ}清^{セイ}三^{サン}編^{ヘン}卷^{クワン}之^ノ二^ニ

三^{サン}上^{ジョウ}

